

ふじがとどろ

～酒井明 説話集 36※～

※今ノ山とは、三原村の山。

※とどろ とは、滝のこと。

昔々、今ノ山のふもとにお百姓さんが住んでいました。ある年のこと、それはそれは大変な日照が続き、田畑の作物は育たずひからびて、稲もしおれてしまいました。

お百姓は、谷川のわずかな窪みに溜った水を、水車でくみあげ作物に与え、昼夜問わず動かしました。その音は山間に響いて、とても綺麗な音がしました。心を込めて回す気持が、美しい音色となって響いたのでしょう。

音色は、今ノ山を越え遥か遠いふもとまで、響き渡りました。

そこに住む大蛇は、もっと近くで聴いてみたくなりました。大蛇の姿のままでは、村人を驚かせてしまうので、蛙の姿に変え人里まで降りてきました。

蛙は、水車の台にとまって、ジッと音色を聴いていました。それを見かけたお百姓さんが、つぶやくように

「お前が雨を降らせてくれたら、うちの娘を嫁にやってもいいが…」
と言いました。

するとどういふ事でしょうか、真っ黒い曇が出てきたかと思うと、大粒の雨がうつすように降って来たのです。おかげで田畑の作物が、みんな生き返りました。

しかしそれからというもの、とても不思議な事が起こりました。

お百姓さんの一人娘のお藤は、和尚さんに手習いするため、お寺に通っていましたが、和尚さんは

「近頃ちっとも来ないが、どうしているのか」
と両親に訪ねました。毎日支度をして、家を出て行くのにどうしているのかと不思議に思い、娘の様子を観察していると、着物が濡れていたり、破れていることに気づきました。

そこで両親は、娘の出掛けた後を、こっそりつけてみる事にしました。

お藤は、山や谷を越え、とどろの淵に立っていました。そこが、大蛇の

住むとどろの淵だったのです。もしやと思ったお百姓は、突然声を掛け、振り向いたお藤は、何も言わず、とどろの中に飛び込んでしまったのです。

それから、いくら覗いてみても、お藤は上がってきません。辺りは静まりかえっていました。仕方なく、両親は家に帰りました。

そして何日かが過ぎ、ある晩のこと、静かに戸を叩く音が聞え、さては…と思った両親は、急いで戸を開けました。

するとそこには、一匹の大蛇が横たわっていました。大蛇は、「お父さんお母さん、長い間お世話になりました。これが今の私の姿です。もう元の姿には戻れません。これでお別れですが、達者で暮して下さい」と言い、大蛇の姿になったお藤は、またたく間に姿を消してしまいました。

あの時、蛙にあんな事を言わなければ、こんな事にはならなかったのにと、お百姓はとても悔やみました。

しかし、その大蛇のおかげで、その年の収穫ができ、命を繋ぐ事が出来たのです。それでも可愛い娘が、二度と帰って来ないことを悲しんで、両親は、泣いて泣いて、とうとう泣き死んでしまいました。

※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会（当時）長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。

